

天声人語

千葉県野田市の小学4年生、栗原心愛さんが亡くなつてから半月余りが過ぎた。胸がつぶれるような話ばかりが日々報じられる。娘に虐待を繰り返す父親を、母親も止められなかつた。彼女は捜査当局に、こんな内容の供述をしているという▼「娘が暴力を振るわれていれば、自分が被害に遭うことはないと思つた。仕方がなかつた」。矛先が自分に向かわぬよう娘へとそらしたとすれば、信じがたい保身である。しかし、それと変わらぬ行動を、児童相談所や教育委員会もしていかないか▼野田市教委は父親の恫喝に負け、心愛さんが暴力の被害を記したアンケートを渡した。「精神的に追い詰められて、やむにやまされず渡してしまつた」という。その結果子どもがどう追い詰められるかは、考えないようになつたか▼言葉を失うのは、児童相談所の無為無策である。危険があるとして一時保護をしながらも、その後は腰が引けていた。家庭を訪問して父親と向き合うこともなかつた。虐待問題のプロとして、介入する権限を十分持つていいはずなのに▼二度と繰り返してはならない。昨年の3月、東京都目黒区で5歳だった船戸結愛ちゃんが虐待死したときにも、呼ばれた言葉である。起きたばかりの悲劇が、教訓にも自戒にもならなかつた。鈍感さをもたらした根っこに何があるのか、いまだ明らかになつていない▼検証も対策も、一刻を争う。だれかたすけて。そんな小さな声はこの瞬間も、どこから発せられているのだ。

2019・2・11